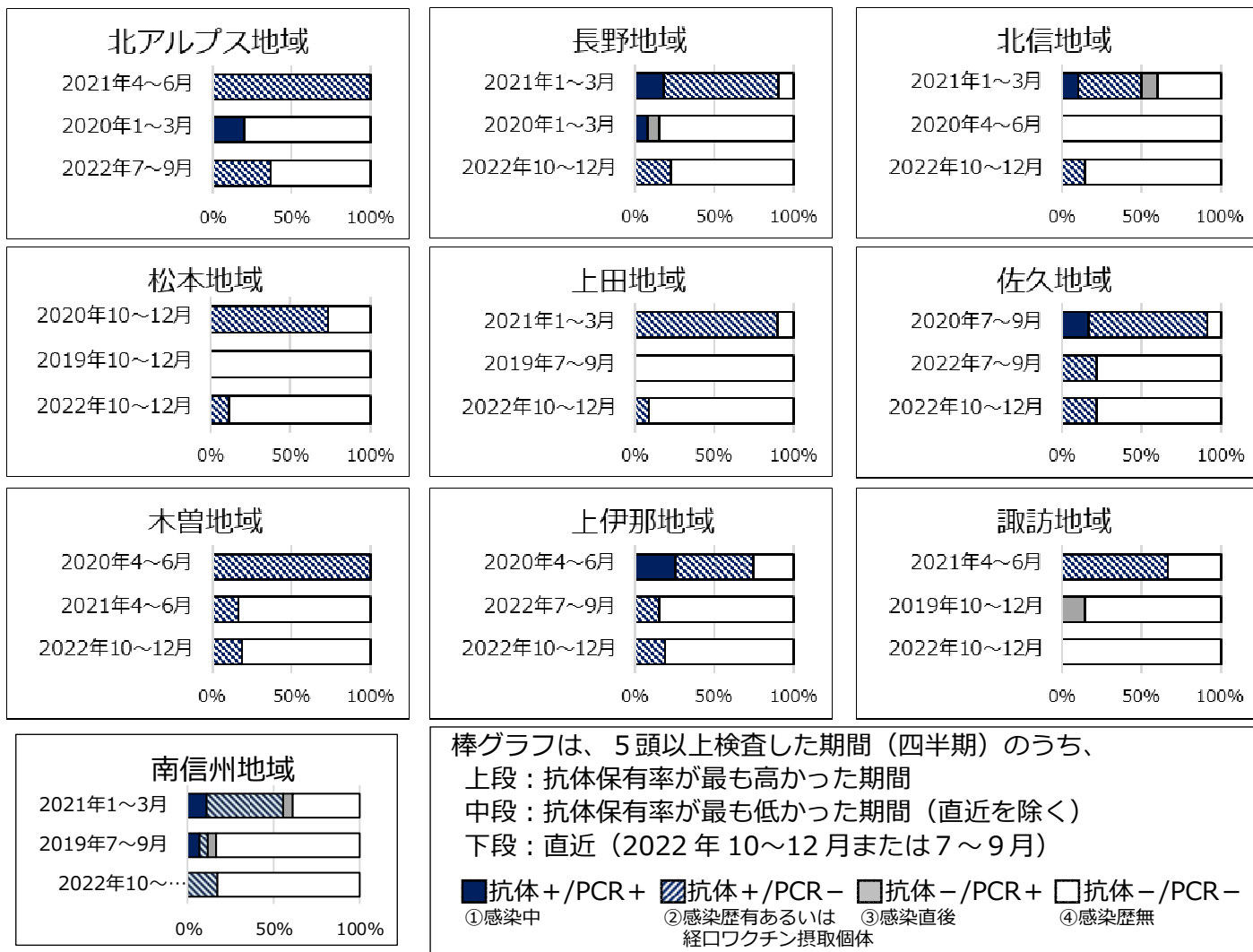


家畜衛生情報

野生いのししの検査結果から、今後の豚熱感染リスクを考える

2018年に26年ぶりに発生した豚熱は、疫学調査結果から、豚熱ウイルスが野生いのししから飼養豚へ感染したと言われています。本県でも猟友会と市町村にご協力いただき、2019年7月から野生いのししのウイルス及び抗体保有状況を調査しています。



野生いのししで感染が拡大するリスクは高い状況であると考えます

2018年9月に岐阜県で豚熱が発生して以降、県内では2019年7月に木曽地域で初めて豚熱ウイルスに感染した野生いのしし（PCR+）が確認されました。その後、南信州、松本、上伊那でも確認され、12月に諏訪、上田、2020年1月に佐久、2月に長野、3月に北アルプス、7月に北信と県下全域で確認されました。地域により時期は異なりますが、感染が拡大したことにより抗体保有率が上がり、100%となった地域もありました（グラフ上段）。その後、感染が収束したことや野生いのししの世代交代がすすんだことから、抗体保有率（①及び②に該当する個体）は下がり、直近では、ヨーロッパでの集団免疫の目安とされている40%を県下全域で下回っています（グラフ下段）。

今年度、県内でウイルス感染した野生いのしし（PCR+）が確認されたのは2事例ですが、隣接県では多数確認されています。県内の野生いのししの抗体保有率は低く、ウイルスが侵入すると再び感染が拡大するリスクは非常に高いと考えられます。

野生いのししで感染が拡大すると、飼養豚への感染リスクが高まります。特に、春以降は抗体を保有しない幼獣が増えることが予想されますので、経口ワクチンによる免疫付与や調査の継続が重要です。

飼養豚に接種している豚熱ワクチンは効果の高いものですが、ワクチンの性質上、免疫の空白期間ができることは避けられません。養豚場へウイルスが侵入しないよう対策をお願いします。